

肝深部に存在する大腸癌肝転移に対する肝実質温存肝切除について

松 木 亮 太

杏林大学医学部外科学（消化器・一般外科）

今回、受賞させていただいたこの論文は、出向先であるがん研有明病院で施行された手術データを元に執筆した自身では初の英文論文です。

大腸癌肝転移は肝切除により予後を改善し、5年生存率が約4割と高い治療効果を誇ります。肝転移に対する至適術式は腫瘍を露出しないように切除する部分切除が奨励されていきます。このような肝実質を温存した肝切除 Parenchymal sparing hepatectomy (PSH) は術後肝不全等の合併を減少させ、また肝再発を認めた場合に、再肝切除施行率を向上させることが報告されています。しかしながら、深部に存在する肝転移は、肝内に深く切り込み、また重要な脈管との位置関係から、肝部分切除での完全切除がしばしば困難であり、解剖学的に大きな肝切除 (Major hepatectomy:MH 3重区域以上の肝切除) が選択されることもあります。当然、MHは切除肝容量が大きくなり、患者の肝予備能などの問題から切除困難もしくは切除不能と判断せざるを得ないこともあります。このような症例でも、日本では古くから術中超音を駆使した肝部分切除術が施行されてきましたが、特に海外の施設ではMHが選択されることも少なくないのが現状です。

今回の論文の目的は深部に存在する大腸癌肝転移に対して行ったPSHの手術成績と長期成績について検討することでした。

今回の検討では、2005年から2013年に施行された大腸癌肝転移の切除症例510例のうち、腫瘍の中心が肝表面より3cm以上深部にあり、かつ腫瘍径が3cm未満（肝表面より視触診で認識困難な病変）であった63症例に対して、PSH施行群40例とMH施行群23例の2群に分けて比較検討しました。結果は、PSH群の方が切除に要する時間が長く、離断面の面積が広い結果で、MHと比較して手術の難易度は高いことがわかりましたが、合併症発生率や根治性、再発率に関しては両群間で有意差を認めませんでした。またPSHを施行した症例のうち、16例（40%）の症例で、MHでの切除を想定した際に、肝容量不足で耐術困難でした。PSHは大腸癌肝転移に対して、根治性を損ねることなく、切除の可能性を広げる有効な術式であることが示せたと考えています。大腸癌肝転移に対する肝部分切除を駆使したPSHは、日本では、ごく一般的に施行されてきた術式ではありますが、改めてこの術式の意義を示せた論文であると考えています。